

清・張自超の『春秋宗朱辨義』について (中)

On Zhang Zichao's Chunqiu zong Zhu bianyi (Distinguishing the
Meaning of the Spring and Autumn Annals following Zhu Xi)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

(4) 『春秋宗朱辨義』總論

張自超は總論で、自分の解釈の立場を次のように述べる。

經旨 [について] の先儒の講解 切當 (適切) にして易うる可からざる者は再び發明 (説明) せず。其の前人の合わざるの説の後人が已に辨ずること有る者は再び辨ぜず。或いは合わずと雖も、大義に於いては關する無き者は亦た置きて論せず。凡そ辨論する所は必ず前後の書する所を反覆し、比事して以て其の通ず可きを求む。又た諸儒の説を合わせ、叅互斟酌し、其の非なる者を去り、其の是なる者を存し、未だ敢て以て臆斷せざるなり。其れ朱子に於いては則ち已に言う者は其の言を引き、未だ言わざる者は其の意を推す。間に朱子の意に非ず、或いは朱子 曾て之を言うも、鄙見するに微かに然らざる者有るも、亦た未だ敢て阿私 (おもねり) して之に曲殉 (まげてしたがう) せざるなり。總じて大義を發して卷首に列す (『春秋宗朱辨義』卷首・總論・一葉)。

すでに明らかになっていることや大筋に関係しないものは議論しない。議論するところは前後を比較検討して通じるようにする。また、これまでの議論を斟酌して正しいと思われるものを残して、臆斷しない。朱子の解釈については、言及されているものはその発言を引き、そうでないものはその意味を推し量る。朱子と微妙に異なるものについては、曲げてまでしたがわれないというのである。そして、『春秋』の大義を二十条に分けて説明してゆく。

一 孔子は、特別の意思を以て褒貶を行なっているのではない。事実をありのままに書き、その事が正しければ、その記述は褒めているようになり、その事が正しくなければ、その記述は貶めているようになる。また、正しい中に不正があれば、褒めることで貶め、不正の中に正しいことがあれば、貶めることで褒めるようになっている。

孫明復（孫復）⁽¹⁾ 以爲らく『春秋』は貶有りて褒無し、と。朱子 曰く「晉の士勾 齊を伐ち、喪を聞きて還る（晉士勾伐齊、聞喪而還）①は、分明に是れ之を褒むるなり」（『朱子語類』卷八十三・春秋）、と。夫れ王政行われず、「諸侯 放恣にして」（『孟子』滕文公下）、會・盟を専にし、侵・伐を擅にす、其の事 原より褒むる可き無し。葵丘の會（僖公九年九月）・召陵の師（僖公四年夏）②・踐土の盟（僖公二十八年）の周を尊び楚を攘うの聖人 之を取るが如き者に至れば、則ち固より以て褒を貶に寓するなり。其の他 彼れ此の事に善しとし、其の辭 之を許すが若きも、其の意憾み有るが若き者は則ち又た以て貶を褒に寓するなり。朱子 曰く、『春秋』は仁義を貴とび、功利を賤しむ、王道を貴とび、伯（霸）功を賤しむ、と。又た曰く、「『春秋』は王法を明らかにし、亦た五伯（霸）の功を廢せず」（『晦庵集』卷八十三「題趙清獻事實後」）、と。此れに通ずれば、則ち褒貶知る可し。其の褒を貶に寓し、貶を褒に寓するの義 知る可し。蓋し聖人意有りて以て褒貶を爲すに非ず。其の事に據り之を直書し、其の事 是なれば則ち其の辭 褒むるが若し、其の事 非なれば則ち其の辭 貶なるが若し。其の事 是の中に非有り、非の中に是有れば、則ち其の辭 褒を以

(1) 管見の及ぶところ、この発言そのものは、孫復の『春秋尊王發微』には見えない。ただし、宋・王得臣（嘉祐四年〔一〇五九〕の進士）の『塵史』に、泰山の孫復明先生、『春秋』を治めて『尊王發微』を著わし、大いに聖人の微旨を得……故に曰く、『春秋』 褒無し、と（『塵史』卷中・經義）。

とある。また、『經義考』に引く黃澤の発言に、

黃澤 曰く、孫泰山（孫復）謂う、『春秋』は貶有りて褒無し、と。若し此れに據りて經を解すれば、則ち舛謬に勝えず（『經義考』卷一百七十九・春秋十二・「孫氏復春秋尊王發微」条所引「黃澤曰」）。

とある。

て貶と爲すが若く、貶を以て褒と爲すが若し（『春秋宗朱辨義』巻首・總論・一葉）。

①『春秋左氏傳』（襄公十九年・傳）に「晉士匄侵齊，及穀，聞喪而還，禮也」。ただし、『春秋左氏傳』（襄公十九年・經）・『春秋公羊傳』（襄公十九年）・『春秋穀梁傳』（襄公十九年）・『春秋宗朱辨義』（巻九・四十葉）は、「晉士匄帥師侵齊，至穀，聞齊公卒，乃還」。

②『春秋宗朱辨義』巻五「〔僖公四年〕楚屈完來盟于師盟于召陵」条に「……蓋し『春秋』の義 楚を攘^{はら}うより大なるは莫し。齊の桓〔公〕の伯（覇） 召陵の盟より大なるは莫し。齊の桓〔公〕の楚を外にしてよりの後、中國 内外の別を知る。晉の文〔公〕之に因りて起き、後世に至る。力 以て楚を制する足らずと雖も、未だ嘗て楚を制するを以て名と爲さずんばあらず。故に『春秋』 召陵・城濮に于いて皆な詳しく之を序^のぶるなり」（『春秋宗朱辨義』巻五・僖公・十葉「〔僖公四年〕楚屈完來盟于師盟于召陵」条）。

二 『春秋』は、周室の權威が衰えて、諸侯が勝手な行動をとるようになった理由を明らかにしたものである。孔子は魯の史書に手を加えて、その罪の大小をはっきりさせた。そのため、孟子が「『春秋』は天子の事なり」（滕文公下）と言っているように、『春秋』には天下を治める方法が寓されているのである。

孟子 曰く、「王者の迹^や 熄みて詩 亡ぶ。詩 亡びて然る後に春秋^{おこ} 作る」

①（離婁下），と。春秋の作るは、以て王迹を存するに非ず。以て王迹の熄む所以にして詩の亡びる所以^{あらわ}を著すなり。會・盟・侵・伐②は、諸侯 自ら専らにし、王 禁ずる能わず。君を弑す・國を篡^{うば}うに（『論語』先進「齊景公問政於孔子」条・朱注「啓陳氏（陳恒）弑君篡國之禍」），王 討つ能わず。世を繼ぎて③、上に命を稟^うけず、又た擅に之を廢立す。大夫 世家④にして、國に命卿（天子の命により爵位・冠服を賜つて卿となったもの）無く、又た専ら之を殺す。王世子（僖公五年） 出でて會し、天王 勞を下

して其の非を知らず。伯（霸）主に朝して天王に朝せず、相い沿りて以て故と爲す。名は楚を攘^{はら}うと爲して實は則ち伯（霸）を争う。名は王命を請うと爲して實は則ち王臣を〔使〕役す。特に戎狄 四たび侵し、呉・楚強横にして以て大亂の世と爲すのみならざるなり。而して内の諸侯の王無く、伯（霸）主の王無きこと、亦た已に甚だし。夫子 魯史を筆削し、直ちに冊に書し、罪の大小 俱^{あらわ}に著る。故に孟子 曰く、「『春秋』は天子の事なり」（滕文公下）③、と（『春秋宗朱辨義』巻首・總論・一葉～二葉）。

①朱注に、

王者之迹熄とは、平王 東遷し、政教號令 天下に及ばざるを謂うなり。詩 亡ぶとは、〔『詩經』王風の〕黍離 降りて國風と爲り、雅（大雅・小雅）亡ぶを謂うなり。『春秋』とは、魯の史記の名なり。孔子 因りて之を筆削し、魯の隱公の元年に始む。〔これは〕實に〔周の〕平王の四十九年なり（『孟子』離婁章句下）。

とある。また、『朱子語類』（巻五十七・孟子七・離婁下・「王者之迹熄章」）に、次のように言う。

「王者之迹熄而詩亡、詩亡然後春秋作」を問う。曰く、^ここの道理の緊要（要点）は「王者之迹熄」の一句の上に在り。蓋し王者の政存すれば、則ち「禮樂征伐 天子より出ず」（『論語』季氏）、故に雅の詩自ずから上に作られ、以て天下を教ゆ。王迹 滅熄すれば、則ち禮樂征伐 天子より出でず、故に雅の詩 復た上に作られず、詩 降りて國風と爲る。^こ是を以て孔子 『春秋』を作り、天下の邪正を定め、百王の大法を爲すなり。^こ（『朱子語類』（巻五十七・孟子七・離婁下・「王者之迹熄章」））。

②侵伐：『春秋宗朱辨義』巻三・「莊公二十有八年、春王三月甲寅齊人伐衛、衛人及齊人戰、衛人敗績」条に「……蓋し春秋の初め、外の諸侯の「侵」・「伐」は大夫の名いわず、是非曲直は則ち事に因りて以て見わ^{あら}す。爵を書す・「人」と書す・「師」と書し以て褒貶を爲すに在らざ

るなり……」(『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・四十七葉「莊公二十有八年，春王三月甲寅齊人伐衛，衛人及齊人戰，衛人敗績」条)。

③繼世:『周禮』秋官・司寇刑官之職・大行人・「凡諸侯之邦交，歲問也，殷相聘也，世相朝也」条の疏に「父死子立曰世。是繼世之念」。

④世家:『孟子』滕文公下・「仲子，齊之世家也」の朱注に「世家，世卿之家」。

⑤『孟子』告子下に「[齊の桓公が諸侯を葵丘に集めて誓約書を作った。その第四条に] 士は官を世々にすること無かれ。…^{ほしいまま}專に大夫を殺すこと無かれ」。

⑥朱注に「胡氏(胡安國)曰く、仲尼『春秋』を作り、以て王の法を寓す。典を厚くし、禮を庸い^{もち}、德(有德なる者)に命じて[秩序づけ]、罪を討[ちて賞罰をはっきりさせた]。其の大要は皆な天子の事なり。孔子を知る者は、此の書の作らるるは、人欲の横流するを遏め^{とど}、天理の既に滅するを存し、後世の爲に慮至りて深遠なりと謂う。孔子を罪する者は、以て其の位無く二百四十二年南面の權に託し、亂臣賊子をして其の欲を禁じ^{ほしいまま}肆にするを得ずして、則ち威えしむと謂う。愚^{おも}謂えらく、孔子『春秋』を作り以て亂賊を討つは、則ち治を致すの法もて萬世に垂らす。是れ亦た一治なり、と」(『孟子』滕文公章句下)。

三 『春秋』における是非は、書くべきことは書き、削るべきことは削ることで示し、褒貶は、その是非でもって示す。『禮記』經解の「辭を屬め^{あつ}事を比^{なら}べるは、春秋の教えなり」は、隠れたものをあれこれと探し出すというものではない。

『春秋』 事の此に在るを書して義の彼に在るを示す者有り。事の前に在るを書して義の後に在るを示す・事の後に在るを書して義の前に在るを示す者有り。書せざるを以て義を示す者有り。疊書(重複した書き方)以て義を示す者有り。煩文(煩雑な文)以て義を示す者有り。省文以て義を示す者有り。閒文(重要でない文)以て義を示す者有り。微文以て義を示す者

有り。義の人に係りて其の事 必ずしも詳しくからざる者有り。義の事に係（関係づけ）て其の人 必ずしも詳しくからざる者有り。其の事を書して文を同じくし義は各々其の是非を著すに在る者有り。其の人を書して事を同じくし義は其の善惡を分別するに在る者有り。一事を書し數義を具うる者有り。數事を書し一義を明らかにする者有り。蓋し是非は筆削①を以てして見し、褒貶は是非を以てして見す。「事を比べ辭を屬むるは、『春秋』の教えなり」②とは、固より鉤深（深きを鉤し）し索隱（隱を索め）③を待つ無きなり（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・二葉～三葉）。

①『史記』孔子世家に「至於爲『春秋』，筆則筆，削則削。子夏之徒不能贊一辭。弟子受『春秋』，孔子曰，後世知丘者以『春秋』，而罪丘者亦以『春秋』」。

②『禮記』經解は「屬辭比事，春秋教也」となっている。鄭玄は「屬とは、猶お合のごときなり。『春秋』は多く諸侯の朝聘・會同を記し，相い接わるの辭，罪辯の事有り」と注する。

③『易』繫辭上・第十一章に「探蹟索隱，鉤深致遠」。

四 朱子は「孔子は『春秋』を作り，当時の事をそこに実写した」と言っている。それは，見ただけで畏懼する効果があるためである。爵位を加えたり除いたりすることで，賞罰を示しているというのは誤りである。

諸侯の「侵」・「伐」の，魯の君・大夫 與からざる者〔の例を考えると次のようになる〕。〔魯の〕文公以前，「侵」は則ち「僖〔公〕二十八年，晉侯侵曹」〔の〕一〔つの例に〕 爵を擧ぐ。「伐」は則ち「隱〔公〕四年，宋公・陳侯・蔡人・衛人伐鄭」・「僖〔公〕十年，齊侯・許男伐北戎」・「〔僖公〕十八年，宋公・曹伯・衛人・邾人伐齊」・「〔僖公〕二十二年，宋公・衛侯・許男・滕子伐鄭」・「〔僖公〕二十三年，齊侯伐宋」・「〔僖公〕二十八年，晉侯伐衛」〔の〕六〔つの例に〕 爵を擧ぐのみ。其の他は「人」と稱し諸侯・大夫 詳しくせざる者なり。蓋し「禮樂征伐 諸侯より出づ」（『論語』季氏）。

大夫 將なりと雖も、皆な諸侯の事なれば、必ずしも大夫を名いわず。〔また〕必ずしも諸侯の爵を擧げずして義 自ずから見る。〔魯の〕文公以後、禮樂征伐 大夫より出づ、故に大夫の名を詳しくし以て義 見す。大夫の將に非ざる者は則ち諸侯の爵を擧げて以て之を別つ。其の必ずしも詳しくらざる者有るは、亦た畧に従いて「人」と書す。故に前は則ち「人」と書する者は十の七八、後は則ち「人」と書する者は十の二三。此れ『春秋』の大義なり。諸儒 前の「人」と書する者に於いて槩して以て貶と爲し、事に於いて差善^{ママ}有りて以て通ず可からざる者に至れば、則ち又た以て「將卑師少」①と爲す。其れ後の名を稱し「帥（率）師」と稱する者に於いて槩して以て貶無しと爲し、事に於いて極惡有りて以て通ず可からざる者に至れば、則ち又た以て「貶絶」②を待たずして惡 自ずから見ると爲す。〔こうした諸儒の議論のために〕是非予奪 遂に實を失うに至る。朱子 曰く、「夫子 『春秋』を作り、當時の事 實寫して此に在り」（『朱子語類』卷八十三・春秋）、と。人の見る者は自ずから畏懼する所有り。其の爵を去る・其の爵を予う・其の功を賞す・其の罪を罰すと云うが若きは、却つて是れ謬なり。詳しくは各條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・二葉～三葉）。

①將応師少：『公羊傳』隱公五年・「秋，衛師入盛」条に「曷爲れぞ或いは「率師」と言い、或いは「率師」と言わず。將 尊く〔何休注：將 尊者，謂大夫也〕して師 衆ければ「某率師」と稱す。將 尊くして師 少なければ〔その〕將を稱す。將 卑しく〔何休注：將卑者，謂士也〕して師 衆ければ「師」と稱す。將 卑しくて師 少なければ「人」と稱す。君 將なれば「率師」と言わず。其の重き者を書す」。また、『春秋宗朱辨義』卷一・「〔隱公五年〕秋衛師入郕〔郕〕，『公〔羊傳〕』作「盛」条に「…『公羊〔傳〕』は、以て「將 卑しくて師 衆ければ「師」と曰い、將 尊くして師 衆ければ「某帥（率）師」と曰う」（隱公四年・「秋，衛師入盛」条）と爲す。然らば則ち『春秋』の前半

は〔魯以〕外の諸侯に「師」と書すること多く、「帥（率）師」と書せざる者は、皆な卿大夫の將に非ざるか。凡そ大衆を用いるに合わず、而して悉く其の將を卑しむるや、以て通ず可からず。〔その意味するところは〕以て大夫の強きを著わさず、必ずしも其の人を名いわざるのみ。故に凡そ「師」と書する者は、其の大衆を用いるを譏り、義は將の尊卑に繋がらざるなり」（『春秋宗朱辨義』卷一・隱公・二十四葉・「〔隱公五年〕秋衛師入郕」條、『公〔羊傳〕』作「盛」條）。

②貶絶：『公羊傳』昭公元年・「叔孫豹會晉趙武・楚公子圍・齊國酌・宋向戌・衛石惡・陳公子招・蔡公孫歸生・鄭軒虎・許人・曹人于澠」條に「…『春秋』 貶絶を待たずして、罪惡^{あらわ} 見る者は、貶絶せず^{あらわ}以て罪惡^{あらわ} 見す。貶絶し然る後に罪惡^{あらわ} 見る者は、貶絶し以て罪惡^{あらわ} 見す」。

五 『春秋』は事実を記した書物である。そして、義はその中にある。ただ事実関係がはっきりしなければ、義を考えても通じないところも存在する。そのため、朱子も理解できないところがあるとした。それなのに、どうして、『春秋』学者はすべて解釈できるとするのであろうか。

『春秋』は紀事の書なり。而して義は即ち事の中に在り。苟し事を攷えて其の實を得ざれば、則ち其の義を索めて以て強いて通ず可からざる者有り。諸儒 事に於いては、則ち全く『左氏〔傳〕』を信じ、事の禮に合う・禮に合わざる者に於いては、則ち三禮を〔折〕衷し以て之を斷ず。夫れ周の禮の舊きは、孟子の時に當り、諸侯 其の己を害するを惡みて之を去る。其の詳は已に聞くを得可からず①。況や漢儒の襍集するの書もて其の盡く據りて以て『春秋』を論ず可きをや。『左氏〔傳〕』の浮夸（誇張）なる」（韓愈「進學解」）は其の全く信ず可からざること、抑そも又た明らかなり。故に『春秋』 卒解す可からざる者有り。當に三傳の文を同じくし古禮の徴す可きを以てしても竟に一つも闕疑（疑いを闕く：疑わしいところを別に

する)せざるべからざるなり。[それなのに] 諸儒 惟だ坐して肯て闕疑せず。故に『左氏 [傳]』を信ずる者は、諸を『左氏 [傳]』に取り、『左氏』を信ぜざる者は、則ち又た撰するに己が意を以てす。三禮を攷證する者は、則ち三禮の成言を以て『春秋』の已事(往時)を斷ず。而して漢儒 『春秋』及び三傳の説に附し以て禮と爲す者の正に多きを知らざるなり。朱子 經を解して文の通じ難き者に於いては則ち「疑うらくは悞ならん」・「疑うらくは衍ならん」・「疑うらくは闕文有らん」と曰う。義の以て卒合す可からざる者に於いては則ち「未だ詳らかならず」と曰う。兩説の通ず可き者に於いては則ち「未だ孰れが是なるかを知らず」と曰う。禮の信を徴す可きこと無き者に於いては則ち「攷うる可からず」と曰う。夫れ朱子の學に博く、理に精なるを以て、其の解經の虛公嚴謹なること且に此の如し。何ぞ『春秋』を説く者の謾として自ら以て能く其の大を觀て、而して其の一句一字に通じ義を漏らすこと無きを會すと爲さんや。竊かに恐る悞文は特に「郭公」のみならず②、闕文は特に「夏五」のみならず③、疑義は特に桓 [公] 十三年に王を書せず④、及び兩つ秋冬を闕くのみならざるを。詳しくは各條の下に見ゆ(『春秋宗朱辨義』卷首・總論・三葉～四葉)。

①夫れ周禮の…:『孟子』萬章下に「北宮錡 問いて曰く、周室の爵祿を班するや、之を如何、と。孟子 曰く、其の詳は聞くを得可からざるなり。諸侯 其の己を害するを惡みて、皆な其の籍(記録)を去る……」。

②郭公:『春秋宗朱辨義』卷三・「〔莊公二十四年〕郭公」条に「文定(胡安國)は郭 亡ぶの義とするは是と爲す」(『春秋宗朱辨義』卷三・莊公・四十一葉「〔莊公二十四年〕郭公」条)。また、『春秋胡傳』卷九・「莊公二十四年郭公」条に「此れ郭公なり。義 曉る可からず。先儒 或いは以て郭 亡ぶと爲す。傳に於いて之れ有り。齊の桓公の郭 父老に問いて曰く、郭 何の故に亡ぶ、と。曰く、其の善を善とし惡を惡とするを以てなり、と。公 曰く、子の言の若ければ、乃ち賢君なり。何ぞ亡ぶに至らん、と。父老 曰く、郭君 善を善とし用いる能わず、

悪を惡とし去る能わず。所以に亡ぶなり、と。其の時と事とを攷うるに、之を「郭亡」と謂うは、理 或いは然り……」。

③夏五：桓公十四年に「夏，五月」とあるべきところが「夏，五」になっている。

④桓十三年に王を書せず：『春秋宗朱辨義』卷二・「〔桓公〕二年春王正月」条に「桓〔公〕の十八年の間、王と書す・王と書せざるの説 終に定め難し。但だ文に借りて義を立つれば、則ち元年に王と書するは以て桓〔公〕の隱〔公〕を弑するの罪を正す、十年に王と書するは天道人事 十年に一變するも桓〔公〕の君を弑するの罪は滌ぐ可からず、十八年に王と書するは君を弑するの罪は其の身 已に歿すと雖も王法赦すを得ざるを明らかにす。茅堂胡氏の説 亦た自ずから通ず可し。二年に王と書するに至るは『穀梁〔傳〕』（「〔桓公〕二年春王正月，戊辰，宋督弑其君與夷」条の傳）以て「與夷（宋・殤公）の卒を正す」と爲す。文定（胡安國） 以て宋督の罪を正すと爲す（『春秋胡傳』卷四・「桓公二年春王正月」条）。茅堂 又た以て桓〔公〕の稷に會し亂を成すと爲すは、俱に牽合に屬す。惟だ家氏（宋・家鉉翁） 以て喪事の未だ終わらず猶お王の討つを望むがごとしと爲すは、庶幾んど之に近きか（『春秋宗朱辨義』卷二・桓公・三葉「〔桓公〕二年春王正月」条）。

六 爵・氏・名・字の記述は、孔子が基づいた史書に従っているだけで、孔子が褒貶の意味をこめて手を加えたのではない。

諸儒 「『春秋』は字を稱するを以て褒と爲す」（宋・葉夢得『春秋識』「春秋公羊傳識・卷一・隱公元年冬十有二月祭伯來」条），と。内は「季子 來歸す」（閔公元年・公羊傳/穀梁伝/左傳の杜預注）①の如く、外は「宋の子哀 來奔す」（文公十四年・左傳）とするが如し。字を稱するの類（數）皆な以て其の賢を褒むると爲すなり。顧^ただ邑を析きて仇に歸するの紀季に於いては則ち之を賢とし（莊公三年・公羊傳），亂に因りて國を復する許叔

に於いては則ち又た之を罪し（桓公十五年・穀梁伝）、蔡季 國に歸るに於いては則ち之を賢とし（桓公十七年・公羊傳の何休注）、「蕭叔 公に朝す」に於いては又た之を罪し（莊公二十三年・穀梁伝）、「高子 來り盟す」に於いては則ち之を賢とし（閔公二年・公羊傳/穀梁伝）、「仲孫 難を省る」に於いては則ち又た之を罪す（閔公元年冬・左傳）。「華孫 來り盟す」（文公十五年）の義の通ず可からざるに於いては則ち又た以て義 名に係（關係づけ）ずと爲し、終に得て定まらずと説く。朱子 曰く、「王人子突 衛を救う」（莊公六年）の如きは、自ずから是れ衛 當に救うべし。當時個の子突有り。夫子 因りて他の名字を存す。如何ぞ却って王人とのみ道い本ともと字を書せず、其の衛を救うに縁の故に字を書すとせんや」（『朱子語類』卷八十三・春秋）②、と。此れを推せば則ち爵・氏・名・字は舊史に因り、以て褒貶を寓するに非ずを知るなり。詳しくは各條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・四葉）。

①華孫來盟：華孫は、華耦のこと。華督の孫にあたるので、華孫と書かれる。『春秋宗朱辨義』卷六・「〔文公十五年〕三月宋司馬華孫來盟」条に「文定（胡安國） 毎に『春秋』の字を書するを以て其の賢を褒と爲す。「華孫來盟」の義 通ず可からざるに于いては、則ち又た以て「義 名に係（關係づけ）ず」（『春秋胡傳』卷十五・「〔文公十五年〕三月宋司馬華孫來盟」条）と爲す。然らば則ち此の名いわず、義 名に係（關係づけ）ざれば、則ち彼の字を書するは、又た何を以て其の義字に係（關係づけ）るを見んや。故に當に君命を稱せず、國書を持せざるを以てすべし。〔しかし〕舊史 原より名を稱せず^せと爲すなり……」（『春秋宗朱辨義』卷六・文公・四十一葉・「〔文公十五年〕三月宋司馬華孫來盟」条）。

②『朱子語類』は、「……如「王人子突救衛」（莊公六年）、自是衛當救。當時是有個子突、孔子因存他名字。今諸公解却道王人本不書字、緣其救衛、故書字……」（『朱子語類』卷八十三・春秋）となっている。

七 魯の十二公の「即位」と書くか書かないかは、朱子が「即位と書くのは即位の禮を行なったからであり、前君が弑されたのを繼いで即位と書かないのは即位の禮を行わなかったからである。ただ、桓公のところで即位と書いてあるのは、桓公自身で即位の禮を行なったからである」と言うことにしたがうと、解することができる。

十二公の位に卽くと位に卽かざるとは、文定（胡安國）以爲らく「上は既に命を天王に稟^うけず、内は又た國を先君に承けざれば則ち卽位と書せず」①、と。隱〔公〕・莊〔公〕・閔〔公〕・僖〔公〕是れなり。而して桓〔公〕・宣〔公〕に於いては以て通ず可からず。〔そこで〕則ち以爲らく其の卽位の意の如きは以て其の先君の心を隱^ひすこと無きを著すなり。又た〔亡命中に亡くなった昭公を繼いだ〕定公の以て通ず可からずに於いては則ち遂に説く無きは非なり。朱子 曰く、「卽位を書する者は是れ卽位の禮を行なうなり。故（弑）を繼ぎて卽位を書せざる者は是れ卽位の禮を行わざるなり。桓〔公〕の卽位を書するが若きは是れ桓〔公〕自ら其の卽位の禮②を正せり」（『朱子語類』卷八十三・春秋），と。是に於いて十二公の卽位を書すると卽位を書せざるは以て通ず可きなり。詳しくは各公の元年の條の下に見ゆ（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・四葉～五葉）。

①文定 以爲らく：『春秋胡傳』卷一・「〔隱公元年〕春王正月」条に「……古者諸侯繼世襲封，則内必有所承，爵位土田，受之天子，則上必有所稟，内不承國於先君，上不必稟命於天子，諸大夫拔己以立而遂立焉。是與爭亂造端，而篡弑所由起也……」。

②桓 自ら其の卽位の禮を正せり：『春秋宗朱辨義』卷二・「桓公元年，春王正月公卽位」条に「桓〔公〕の「卽位」と書するは、桓〔公〕卽位の禮を修むればなり。弑君を繼ぎ卽位せざる者は、先君の弑さるるを忍びざればなり。桓〔公〕君の兄を弑し、惟だ諸侯・國人の討つを恐れ、急ぎて禮を修め以て自ら定め、其の君と爲るなり。『春秋』は舊史に仍り以て之を書す。以て後の讀者をして其の故を推求し、因りて

以て桓〔公〕の先君を忍ぶを知らしむ可し。桓〔公〕の先君を忍ぶ所以の者は、他人 君を弑すれば、則ち已に忍びざる有り。已に自ら君を弑す。又た何ぞ忍びざらんや。則ち因りて以て桓〔公〕の與かり聞くを知るが故なり」(『春秋宗朱辨義』卷二・桓公・一葉「桓公元年、春王正月公即位」条)。

八 『春秋』において「侵」・「伐」と記述してあるのは、孔子のもとづいた史書が、実際に起こったことをそのまま記し、孔子はその文章にしたがっただけであり、褒貶にかかわっているのではない。

三傳 「侵」・「伐」を言いて各々同じからず。李氏 之を駁して極めて是なり。文定(胡安國) 以て「罪を聲^{なら}して討を致すを伐と曰い、師を潛^{ひそ}めて境^{うば}を掠^{うば}うを侵と曰う」(『春秋胡傳』卷一・「[隱公二年] 鄭人伐衛」条)と爲すは、亦た未だ當を盡くさざるなり。「天子 討ちて伐せず。諸侯 伐して討たず」(『孟子』告子下)①。「討」を以て「伐」と爲すは、固より不可と爲す。云う所の其の「罪を聲^{なら}す」者は、亦た「伐」を受くるの國に非ず。果たして伐つ可きの罪有らんや。而して人の國を伐つ者は、其の罪を加えんと欲して、辭無きを患わざるのみ。蓋し「伐」と云う者は、執言(罪を明らかにして討つこと：『周易』師卦・「六五、田有禽，利執言，无咎」の程頤注による)して來り、兵を境^{つら}に陳ね必ず服せしめ、而して後に之を去るなり。服せざれば則ち戦う。戦わざれば則ち〔相手は〕守る。〔相手が〕守ることの固ければ則ち之を圍む。〔相手が〕守ることの固からざれば則ち之に入る。故に『春秋』は「伐」と書すの後に則ち或いは戦う、或いは圍む、或いは入るの事有り。而るに「侵」と書するは、之れ無く、執りて以て言を爲す所無し。其の境に入りて即ち去り、志は之を服するに在らず。其の戦いに及ばざれば、何ぞ其の守を用いん。圍むに暇あらざれば、何ぞ入るに至らんや。乃ち文定(胡安國) 以て「潛師」と爲すは則ち然らざるなり。晉の定〔公〕 王臣に會し十八國を合わせ、楚に事有り。而して召陵に「侵」と書す②。「潛師」に非ざること知る可し。文定(胡安國) 『左氏〔傳〕』に

於いて「伐」と言い經に「[楚を] 侵す」と書するに於いて（『春秋胡傳』卷二十七・「[定公三年]」条），『左氏〔傳〕』に「侵」と言い經に「伐」と書する者は、聖人の筆削褒貶の係る所と爲すと謂う。是れ蓋し「侵」と書するを以て其の「伐」に^{あず}予からずと爲し、而して「侵」を貶辭と爲すなり。然らば『易』に「利用侵伐（^{もつ}用て侵伐するに利あり）」（謙卦・六五辭と象傳）と稱するは則ち「侵」と「伐」とは皆な師を用いるの名なり、皇矣（詩・大雅文王之什）の文王を稱して「侵阮徂共（阮〔國〕を^{きよう}侵し共（阮國の地名）に^ゆ徂く）」と曰い、武王 師に誓いて亦た「侵於之彊（之が彊を侵す）」（『書經』・泰誓中/『孟子』滕文公下）と曰い、[『周禮』・大] 司馬の「九伐の法」に、「固を負みて服せざれば、則ち之を侵す」（『周禮』・夏官大司馬）と有り。則ち「侵」は不善の辭に非ず。又た魯 「伐」を受くれば則ち「伐」と書し、「侵」を受くれば則ち「侵」と書す。魯 人を伐てば則ち「伐」と書し、人を侵せば則ち「侵」と書す。魯史 事の實に據り、夫子史の文に^よ仍る。初めより何ぞ褒貶に係（關係）せんや（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・五葉～六葉）。

①朱注に「討とは、命を出だして以て其の罪を討ち、[諸侯の上に立つ] 方伯・連帥をして諸侯を帥い以て之を討たしむるなり。伐とは、天子の命を奉じて其の罪をして之を伐つなり」（『孟子』告子章句下）。

②『春秋』經に「[定公四年] 三月，公會劉子・晉侯・宋公・蔡侯・衛侯・陳子・鄭伯・許男・曹伯・莒子・邾子・頓子・胡子・滕子・薛伯・杞伯・小邾子・齊國夏于召陵，侵楚」。

九 『春秋』三傳に見えるものの『春秋』經に記されていないことがある。これは、おおきくかわっていないか、記すと煩雑となってしまうからである。不正であるから削ったとか、諱んだために削ったとする議論は、すべて誤りである。

『春秋』の「會」・「盟」は、[魯の] 隱 [公] ・桓 [公] の時、散亂して屬する無し。齊の桓 [公] 興りて始めて命を伯（霸）主に聽けり。桓 [公]

卒し、又た將に散亂せんとし、而して晉の文〔公〕に攝む。晉の世々夏盟を主どり而して諸侯の私會・私盟の行なわざるに至る者は、幾ど百年に及ぶ。晉の伯（霸）漸く衰え、春秋の終りは、其の散亂 春秋の始めと異ならず。名を以て之を言え、則ち「離」と「參」とは私と爲し、「同」を公と爲すなり。事を以て之を言え、則ち事の公なる者は、公と爲し、事の私なる者は、私と爲すなり。義を以て之を言え、則ち義に合う者は、公と爲し、義に合わざる者は、私と爲すなり。其の傳に見え、經に書せざる者有るは、或いは大に於いて故に關する無く、或いは又た煩にして省く可し。諸儒 以て惡みて之を削り、諱みて之を削ると爲すは、皆な非なり（『春秋宗朱辨義』卷首・總論・六葉）。

十 『春秋』において、會・盟・侵・伐・弑君・殺大夫は、すべての諸侯の事を取りまとめて義を示し、朝・聘・卒・葬・祭祀・婚姻・宮殿造営や城邑の建設などの事柄は、魯のことを中心に義を示す。事柄は魯一国のことに掛け、義は天下に関係づけている。ただ、孔子は魯の大惡については、やむを得ず諱んでいるところもある。しかし、すべてに関して魯のために諱んだことはない。朱子のいうように「『春秋』は当時のことをありのままに記述し」、「魯の史書によって事実を書いている」のである。

諸儒 以爲らく『春秋』は内の大惡に於いては則ち之を諱む（『公羊傳』隱公二年等）と。夫れ内の大惡の「弑」を諱みて「薨」と書するは聖人の已むを得ざるなり。且つ地いわざるを以て之を著す①。〔魯の〕桓〔公〕・〔魯の〕宣〔公〕・翬・遂・慶父の賊と爲り、文姜（魯・桓公夫人）・哀姜（魯・莊公夫人）の弑に與かるは則ち終に得て諱まざるなり。其の他 孰れが國母 淫しめを宣す②の醜より大なる有らんや。孰れが齊に朝する・晉に朝するの楚に朝する③の辱より大なる有らんや。孰れが郊・禘・蒐・閏の僭禮・許はたけの田を易かう（隱公八年・傳）・朔を視ざる（文公十六年）の變制・逆祀して僖公を〔閔公の靈位の上に〕躋のぼす（文公二年八月）・倫けがを潰して同姓を娶

る（哀公十二年）より大なる有らんや。孰れが〔魯の〕公子買（僖公二十八年）・〔魯の〕公子偃（成公十六年）の罪無きを刺す④より大なる有らんや。孰れが〔魯・成公元年に始めて〕丘甲の民力を虐用す・〔魯・哀公十二年に始めて〕田賦の民財を厚歛するより大なる有らんや。則ち書を冊に備え、而して又た何ぞ諱まんや。蓋し聖人 魯史に據り以て『春秋』を作る。其の會・盟・侵・伐・弑君・殺大夫は則ち天下の諸侯を統べ以て義を示す。朝・聘・卒・塋・祭（祭の俗字）祀・昏（婚）姻・立宮・城邑の一切の興作の類（數）は則ち皆な魯の事を以て義を示す。事 一國に係り、義 天下に關す。聖人 原より魯を顧忌（はばかる）する所無し。諸儒 但だ滅國を「取」と書し、朝聘を「如」と書し、出奔を「遜」と書するを以て⑤、皆な之を諱むと謂う。而して其の文を婉にし⑥、其の事・其の實を没せず、之を諱むと謂うを得ざるを知らざるなり。諸儒 又た會・盟・侵・伐の公及び大夫⑦を目（名指し）せざる者を以て諱むと爲す。然らば公及び大夫を目（名指し）せざるに即きて其の辭の屬めれば、^{あつ}「及」と曰い・「會」と曰うは、即ち明らかに其の公に非ず即ち大夫なるを知る。何ぞ諱むと爲さんや。諸儒 又た『左氏〔傳〕』の事實の詳に據り、經 書せざる者有れば、諱むと爲す。即ち其の事^{まこと}洵に之れ有るも、義に於いて害無し、又た國に於いて天下に於いて關する無きの故に舊史 書せず、或いは夫子 之を削る。書すること無きを以てして書せざる可し。諱むを以て義と爲すに非ざるなり。『左氏〔傳〕』の尊を諱み親を諱み賢を諱むの説⑧に至れば、抑そも又た然らず。蓋し『春秋』の凌替（衰える）僭亂（下克上）の世に當りて、聖人の道・先王の法 存する者有る無し。聖人 正すに惡を以てす。夫れ禮樂 變じて干戈と爲り、仁義 功利に泯ぶ、諸侯 強にして荊蠻 横す、小侯 滅し大族 興る、篡弑叛亂 跡を世に接す、『春秋』^{おこ}作りて以て其の變亂の實を著し、義をして取らしむるか。之を諱めば則ち『春秋』は亦た以て作らざる可し。朱子 曰く、「『春秋』は當時の事を直載す」（『朱子

語類』卷八十三・春秋), と。又た曰く, 「魯史に據りて以て其の事を書す」(『朱子語類』 卷八十三・春秋), と。然らば則ち何の諱むこと有らんや(『春秋宗朱辨義』 卷首・總論・六葉〜七葉)。

①『春秋左氏傳』 經・「隱十一年。冬十有一月, 壬辰, 公薨」の杜預注に「實弑。書薨, 又不地者, 史策所諱也」。また, 『春秋宗朱辨義』 卷一・「[隱公十一年] 冬十有一月, 壬辰, 公薨」条に「朱子 曰く, 「凡そ魯の君 弑せられれば則ち薨と書し, 以て地いわずして之を著わす」, と。蓋し臣子の隱諱の義は, 聖人の微意なり。『公 [羊傳]』・『穀 [梁傳]』及び伊川 (程頤)・文定 (胡安國) の論 皆な此の如く, 以て易うる無し…… (『春秋宗朱辨義』 卷一・隱公・三十五葉「[隱公十一年] 冬十有一月壬辰公薨」条)。

②宣淫: 『左氏傳』 宣公九年・傳に「[陳の大夫] 泄冶諫曰, 公卿宣淫……」の杜預注に「宣, 示也」。

③『朱子語類』に「……[魯] 宣公の時, 楚の莊王 盛強にして, 夷狄盟を主る。中國の諸侯 齊に服する者は亦た皆な楚に朝し, 晉に服する者も亦た皆な楚に朝す……義剛」(『朱子語類』 卷八十三・春秋)。

④『左氏傳』 經・「[成公十六年] 「乙酉, 刺公子偃」条の杜預注に「魯大夫を殺すを皆な「刺」と言う。義 『周禮』の三刺の法に取る」。

⑤『春秋胡傳』 卷二十一・「[襄公四年] 春, 王三月, 己酉, 陳侯午卒」条に「……夫子 帝王の道を兼ね文質の中を參し, 而して春秋を作り以て萬世を法とす。公 薨じ地いわず, 國を滅ぼすを取と書し, 出奔を孫と稱するの類の如きは, 其の文を放つ所以なり……」。

⑥『春秋胡傳附錄纂疏』 所引の「論名諱劄子」に「孔子 春秋を作り, 凡そ周・魯の事は, 其の文を婉にすと雖も, 名諱に至れば, 並びに本字に依る」。

⑦『穀梁傳』 隱八年九月傳に「可言公及人, 不可言公及大夫」。

⑧『左氏傳』ではなく『公羊傳』閔公元年・「冬齊仲孫來」傳に「『春秋』は尊者の爲めに諱み, 親者の爲めに諱み, 賢者の爲めに諱む」。

(つづく)